

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 14 日現在

機関番号：34310

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24300312

研究課題名(和文) ミュージアムと地域活性化 変容するミュージアムの新たな経営課題

研究課題名(英文) Museum and Community--Towards a New Engagement

研究代表者

河島 伸子 (Kawashima, Nobuko)

同志社大学・経済学部・教授

研究者番号：20319461

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 8,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究により、まず、ミュージアムが今後ますます地域社会づくり、地域経済の再生に向けて大きな役割を果たすことができることを確認した。このような役割への期待は、従来、収蔵品の収集、保存、修復、管理といった業務を中心においてきたミュージアム組織にとって新たな挑戦をもたらすともいえる。地域経済の疲弊、人口減社会といった深刻な問題を抱える日本において、ミュージアムが美の殿堂たる地位に安住してはならないことは明らかである。美の殿堂ではなく、コミュニティの寄り合い場、市民の文化活動のハブ、拠点となることに今後のミュージアム経営はかかっていると思われる。

研究成果の概要(英文)：We conclude from this research project that museums have economic and social roles to play in contributing to local/regional regeneration. Traditionally museums have largely been focused on collection management, but they are now expected to help community building in a unique way. As Japan suffers from problems of economic decline and the decrease in population particularly in local cities and towns, museums would have to become hubs and centres of community culture. Engagement with citizens is a key in new museum management.

研究分野：文化政策学

キーワード：ミュージアム 文化政策 地域創生 まちづくり マネジメント

1. 研究開始当初の背景

本研究は、「新たな博物館のあり方」を市民社会、地域社会との関係から、文化経済学および文化政策学的な視点から読み解こうとするものである。従来の博物館経営論が、管理的な部分に重点を置いていたのに比べ、現在では博物館の社会的使命、地域連携などの面にも注目して博物館の存在意義をとらえるようになってきているが、このような視点をもった研究蓄積、知見は不足気味であった。本研究はその不足部分に対応しようとするものである。

近年発行されるミュージアム関連の文献では、実は新たな博物館の役割に関するものが少なくないが、多くの事例を網羅的に扱うことに中心があり、記述内容があまり深くなかった。一方、指定管理者制度にフォーカスして、ミュージアムの地域活性化、地域貢献といった分野について教科書以上のレベルの議論を展開する専門書も出てきた。しかしながら、本研究で扱うような、文化政策・文化行政、まちづくり、指定管理者制度、マーケティング、評価、社会包摂といった広範な内容を取り扱いミュージアムの地域活性化、地域貢献について、理論面および実証面から体系的に扱う研究が不足していた。

ちなみに、本研究でカバーする内容は、学芸員資格取得のための必須科目である「博物館経営論」(2単位)内で教えられるべきとされている内容の半分にあたるものである。学芸員資格制度の見直し等も進む中、テクニカルな教育内容にとどまらないミュージアム運営論への需要は大きいといえる。

2. 研究の目的

文化政策の考え方、範囲が拡大する中、博物館・美術館(以下、ミュージアム)に期待される社会的役割も増大し、その結果、ミュージアム運営も変容をせまられている。ミュージアムにおいては収集と保存、調査研究という基本的機能は重要な意義を持つ。しかし今日のミュージアムには、教育・普及活動、市民の自己啓発支援、地域におけるアイデンティティの確立、地域経済・観光への貢献など、さまざまな側面から地域活性化に役割を果たすことが期待されている。こうした期待に応えることは容易ではなく、多くのミュージアムは試行錯誤を繰り返しながら少しずつ変容を遂げてきている。

本研究は、国際的状況に照らしつつ事例研究を通じ、我が国のミュージアムの運営・経営課題を分析し、今後のあり方を提言していくものである。

3. 研究の方法

以下のいくつかのテーマについて、文献調査および事例調査を進めた。

- (1) わが国における近年の行財政改革を進めてきた柱の一つである、ニュー・パブリ

ック・マネジメント(以下 NPM)が、ミュージアム運営にどの程度影響を与えてきたか、事例調査を通じて研究する。事例としては、指定管理者制度導入後、外から応募した民間事業者が運営にあたるようになったなど、大きな組織変革を体験した館、評価システム導入に熱心な館などをいくつか選定する。また、外部評価制度が既に存在する場合、その制度導入の効果を検証する。具体的には、文献調査に加え、各館を訪問し、館長、学芸員、地方自治体の文化行政担当者などの主要関係者と面談を重ね、各館の抱える課題を明らかにしていった。

- (2) 新たなミュージアム経営にとって重要性を増しているアウトリーチ活動、インクルーシブなミュージアムといった観点からの調査を進める。具体的には、教育活動で一般的に高く評価されている大原美術館へのヒアリング調査を実施した。この調査より、私立ミュージアムにおいては限られた資源を最大限に活かし、創意工夫を凝らした活動を行っていることが明らかになった。それを踏まえ、大塚国際ミュージアム、足立美術館のヒアリングも行った。一方、東京国立博物館のように、国立の中核的館であっても、大いにマーケティング、鑑賞者開発、ブランディング活動に力を入れている例も調査した。また、この点について先行事例となっているイギリスのミュージアムについても情報を収集した。
- (3) 創造都市計画、まちづくり計画がミュージアムに与えてきた影響を探り、運営面でどのような工夫が必要かを考察した。具体的には、三重県総合博物館 MieMu の新たな設置に伴う一連の事業計画、その評価のあり方などについて考察した。また、特に海外の事例として、イギリスのテート・モダン、ビルバオのグッゲンハイム美術館などを調査し、創造都市政策との連携の成功要因を考察した。
- (4) ミュージアムの運営など、文化事業に対して公的支出を行う根拠は、文化政策における最も根本的な問題として、議論が絶えない。文化それ自体の固有価値、本質的価値、文化事業が生み出す経済的価値、社会的価値、その測定方法などについて、特に近年のイギリスでは学術的研究が深められている。これらをレビューし、さらに最新の理論である「文化は人々の幸福度にどのように影響するのか」というテーマでも研究調査を進めた。
- (5) この他に、各研究メンバーが、地方自治体における文化行政と連携し、実際に、まちづくりとミュージアム運営の基本計画策定に関わるプロジェクト、地方の公立ミュージアムの戦略マップづくり、地方の公立ミュージアムにおける事業評価方針の策定、地方自治体における

文化政策評価事業の実施、など実際のプロジェクトに深く関与して、研究と実践とを同時並行的に遂行した。

- (6) 上記につき報告をし、あるいは専門家を招き討論する場としての研究会を続けた。

4. 研究成果

本研究により、まず、ミュージアムが今後ますます地域社会づくり、地域経済の再生に向けて大きな役割を果たすことができることを確認した。このような役割への期待は、従来、収蔵品の収集、保存、修復、管理といった業務を中心においてきたミュージアム組織にとって新たな挑戦をもたらすともいえる。逆にこのようなミュージアムが果たす社会的役割への期待が大きくなった英国のような国においては、文化政策研究者の間で本来のミュージアムの文化的使命につき見直しをすべきであるという反論があったこと、それに対する更なる議論が起きたことも明らかになった。

しかしながら、わが国のミュージアムにおいては、まだ教育・普及活動ですら、形ばかりのものである傾向も見られ、ミュージアム運営は利用者さらには地域住民全体に目を十分に向けずに進んでいるという問題が大きい状況である。「アウトリーチ」という用語が昨今では文化・芸術セクターの間では使われるようになっており、ミュージアムの例でいえば、コレクションの一部を学校や病院などに持って行き、ミュージアムに来にくい人たちに対して積極的に働きかける活動として一部では事例が見られ始めている。

このような活動が有意義であることはもちろんであるが、さらにこうした活動を深化させ、ミュージアムと市民との間での「エンゲージメント」を深めていく必要がある。これは近接する領域である図書館の領域では既に起きていることである。図書館は、市民にとって単に流行の本を借りる場ではなく、情報を得て自ら学んでいくための支援の場として今や機能し始めている。NPOとして図書館を作り、コミュニティ形成に役立っている事例もあるほどで、こうした動きに比べると、また市民の利用度・距離感においても、ミュージアムは図書館に数歩遅れていると言わざるを得ない。

スペインのビルバオ・グッゲンハイム美術館に見られるような、アイコンックな建築によるミュージアム建設をもって観光客誘致をしていると見ることは表層的評価に過ぎず、実は、その建築デザイン、使用された材料等には地域経済の歴史が刻まれており、新たなビルバオ経済再生に向けた中身、経営方法であることも認識できた。

地域経済の疲弊、人口減社会といった深刻な問題を抱える日本において、ミュージアムが美の殿堂たる地位に安住してはならないことは明らかである。美の殿堂ではなく、コミュニティの寄り合い場、市民の文化活動

のハブ、拠点となることに今後のミュージアム経営はかかっていると思われる。

なお、本研究の成果は「新時代の博物館経営論」(仮題)として、研究代表者および研究分担者の合計3名による共同執筆の形でミネルヴァ書房より出版することが決定した。現在、草稿を準備中である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

佐々木亨「博物館評価を評価する：現状・課題と今後の展望」『博物館研究』47(12), 10-13 (2012) 査読なし。

〔学会発表〕(計7件)

佐々木亨「ミュージアム評価の現状と課題」日本評価学会主催第19期評価士養成講座(2016年3月5日、TKP 麹町駅前カンファレンスルーム、東京・千代田区)

Nobuko Kawashima, 'Development of Socially Engaged Art in Japan', UW-JSPS Symposium on Socially Engaged Art in Japan, November 13, 2015. Seattle, US.

佐々木亨「法政大学資格課程主催シンポジウム「公立博物館・美術館の指定管理運営館の現状と課題」(2015年9月26日、法政大学、東京・千代田区)

佐々木亨「評価を評価する 目標管理の評価とサービス品質管理の評価」文化経済学会<日本>(2014年10月25日、三重県総合博物館 MieMu, 三重県・津市)

Nobuko Kawashima, 'Development of Cultural Economics in Japan—A Literature Review and Implications for International Research', International Conference on Cultural Economics, 26 June 2014, Montreal, Canada.

佐々木亨「未来館者の実態と「第2の交換」- 静岡県立美術館の事例から -」文化経済学会<日本>(2013年11月3日、北海道教育大学札幌駅前サテライト、北海道・札幌市)

Nobuko Kawashima, 'International Cultural Policy—A Preliminary Discussion on East Asian Models'(2012年12月6日、国立台北芸術大学主催国際文化政策会議基調講演)(台北・台湾)

〔図書〕(計13件)

河島伸子「企業メセナ」文化経済学会<日本>編『文化経済学 軌跡と展望』(2016)

小林真理「文化行政と文化政策」文化経済学会<日本>編『文化経済学 軌跡と展望』(2016)

佐々木亨「ミュージアム」文化経済学会<日本>編『文化経済学 軌跡と展望』(2016)

Nobuko Kawashima, Cultural Policy Regimes in East Asia, Wright, J ed, *International Encyclopaedia of Social and*

Behavioral Sciences, Elsevier, 2015.

Nobuko Kawashima, 'Do the Arts and Culture Have a Positive Impact on Happiness? Beyond Methodological Issues', in Tachibanaki, T ed, *Advances in Happiness Research*, Springer, 2015.

佐々木亨「コミュニティとミュージアム」「マーケティング(美術館)」「外部評価」『ミュージアム・マネジメント学事典』学文社(2015)

小林真理編『行政改革と文化創造のイニシアティブ 新しい共創の模索』美学出版(2014)

小林真理「自治体文化行政と行政改革ー理念と現実の乖離」小林真理編『行政改革と文化創造のイニシアティブ 新しい共創の模索』美学出版(2014)

河島伸子「現代美術と著作権法 インセンティブ論に関する一考察」同志社大学知的財産法研究会『知的財産法の挑戦』弘文堂(2013)

河島伸子「ユーザーの創作活動と著作権法の相克」河島他編著『変貌する日本のコンテンツ産業』ミネルヴァ書房(2013)

河島伸子・生稲史彦編著『変貌する日本のコンテンツ産業』ミネルヴァ書房(2013)

佐々木亨『博物館経営論』放送大学教育振興会(2013)

Nobuko Kawashima, 'Copyright as an Incentive for Creativity? The case of contemporary visual arts', in Janet Chan and Kerry Thomas (eds), *Handbook of Research on Creativity*, Edward Elgar, 2013.

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

河島 伸子 (KAWASHIMA, Nobuko)

同志社大学・経済学部・教授

研究者番号: 20319461

(2) 研究分担者

佐々木 亨 (SASAKI, Toru)

北海道大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号: 80292308

小林 真理 (KOBAYASHI, Mari)

東京大学・大学院人文社会系研究科(文学部)・准教授

研究者番号: 20308547

山梨 俊夫 (YAMANASHI, Toshio)

独立行政法人国立美術館国立国際美術館・館長

研究者番号: 10393068

(3) 連携研究者

()

研究者番号: